

戦争の時代に平和について考える ——山上の説教の言葉をてがかりに——

児玉智継

1. はじめに

2022年2月24日の未明、ウクライナを包囲していたロシアが軍事侵攻を開始し、世界に大きな衝撃を与えた。その後、ロシア・ウクライナ戦争は泥沼化し、戦死者は増え続けている。さらに、中東ではイスラエルとイスラム組織ハマスとの間で新たな紛争が起きてしまった¹。パレスチナ・イスラエル戦争では多くの市民、とりわけ女性と子どもたちが犠牲になっている²。いずれの戦争も歴史的な経緯と国民感情もあり停戦は困難であり、かつ終戦は遠い状況である³。

「人間を戦争というくびきから解き放つことはできるのか？」これは、物理学者アルバート・アインシュタインから、精神分析の創始者であるジグムント・フロイトに宛てた手紙の主題である⁴。1932年、国際連盟がアインシュタインに、「今の文明においてもっとも大事だと思われる事柄を、いちばん意見を交換したい相手と書簡を交わしてください。」と依頼した。選んだ相手はフロイト、テー

¹ 2023年10月7日、パレスチナ自治区を実行支配するイスラム組織ハマスが、イスラエルに向けて数千発のロケット弾を発射した。また、ハマスの戦闘員がイスラエルに侵入して襲撃をし、多くの若者たちを捕虜とした。これに対して、イスラエルのネタニヤフ首相は「戦争状態にある」としてガザ地区に激しい空爆を行った。現在もその報復の連鎖が続いている。

² 2024年5月12日時点で、ガザの死者は3.5万人を超え、4割が子どもであるということが報じられた。

³ 2024年4月現在。

⁴ A. アインシュタイン / S. フロイト 『ひとはなぜ戦争するのか』(講談社、2016年)

マは「戦争」だった。

AINSHULTAINの結論はこうである。「人間の心自体に問題があるのだ。人間の心のなかに、平和への努力に抗う力が働いているのだ。……人間には本能的な欲求が潜んでいる。憎悪に駆られ、相手を絶滅させようとする欲求が！」⁵つまり戦争は、人間の攻撃的な本性のゆえに、決してなくならないのだ、と。

フロイトは、このAINSHULTAINの意見に全面的に賛成する。「人間から攻撃的な性質を取り除くなど、できそうにもない！」⁶そのうえで、フロイトは「人間の攻撃性を戦争という形で発揮させなければよいのです。」⁷と述べて、「破壊欲動（＝死の欲動）」に対抗する「生の欲動」、すなわちエロス的な欲動に訴えかけることを提示する⁸。そしてエロス的欲動の現れ、人間のあいだに「感情の絆」を作り出すものはすべて戦争防止に役立つとして、二つの例を挙げる。すなわち、一つめは「愛するものへの絆」であり、二つめは「一体感や帰属意識」である。また、フロイトが提示した戦争防止のためのもう一つの方法が、「文化の発展」を促すことである⁹。「文化の発展を促せば、戦争の終焉へ向けて歩み出すことができる！」¹⁰これは、フロイトの書簡の締めくくりの言葉である。

「人間を戦争というくびきから解き放つことはできるのか？」先に結論めいたことを言えば、答えは「否」であろう。なぜなら、AINSHULTAINやフロイトが言うように、たしかに人間の心自体に問題があるからだ。つまり、罪の問題である。

しかし、だからと言って、我々は罪の力に支配されてはならず、破壊欲動（＝死の欲動）に主導権を握らせてはならないのだ。我々は、キリスト者として、

⁵ 同書、13-15頁

⁶ 同書、45頁

⁷ 同書、46頁

⁸ ここで言われているエロスは、一般に言われる「性（エロス）」よりも幅広いものを意味する（同書、39頁参照）。

⁹ フロイトによれば、心理学的に見た場合に、文化が生み出すもっとも顕著な現象は二つある。すなわち、一つ目は、知性を強めることである。力が増した知性は欲動をコントロールし始めるのである。二つ目は、攻撃本能を内に向けることである。好都合な面も危険な面も含めて、攻撃欲動が内に向かっていくのである（同書、54頁参照）。

¹⁰ 同書、55頁

イエスの教え（あるいは、生き方）に従って、戦争というくびきにつながれながら、「永遠の平和¹¹」の達成を目指していかなければならないのである。新約学者のN.T.ライトがいみじくも言っているように、我々は「神の新しい世界でやがて歌うことになる曲を、いまここで、練習する¹²」ということがなければならないのだ。たしかに、戦争は人間の歴史であったとは言え、戦争の悲惨さのゆえに戦いを避け、平和を希求するのが人間の歴史でもあった¹³と言えよう。永遠に終わらない戦争はないのだ。

二十世紀最大の神学者カール・バルトは、古代ローマの「もしも汝が平和を欲するならば、戦争を準備せよ（*Si vis pacem, para bellum*）！」という格言を言い換えて、「もしも汝が戦争を欲しないならば、平和を準備せよ（*Si non vis bellum, para pacem*）！」¹⁴と言っている。我々は、戦争に備えるのではなく、平和の備えをしていかなければならないのである。なぜなら、フロイトによれば、戦争は「永遠の平和」を実現できないからである¹⁵。

¹¹『永遠平和のために』（*Zum ewigen Frieden*, 1795）は、イマヌエル・カントによつて著された政治哲学の著作である。カントは、「人間は邪悪な存在であり」、「戦争はあたかも人間の本性に接ぎ木されたかのようである」と言う。その上で、「世界の恒久的平和はいかにしてもたらされるべきか」を問うのである。とりわけ、第三条項の「常備軍の全廃」は興味深い構想である。カントによれば、常備軍の存在は、「いつでも戦争を始めることができる」という準備態勢によって、他の国々を絶えず戦争の脅威で脅かし、また「互いに軍事力で優位に立とうとする国家間の野心を刺激し、果てしのない軍備拡張」を促すことになる。その結果、「増大する軍事費のため、平和の方が短期の戦争よりもいつそう重荷となる」という逆説的な事態が引き起こされてしまう。カントは、常備軍の存在が「先制攻撃」「侵略戦争」の原因となるので、「時が経つとともに全廃されるべきである」と主張する。

¹²N.T.ライト『クリスチャンであるとは』（あめんどう、2015年）311頁

¹³南野浩則『旧約聖書の平和論 神は暴力・戦争を肯定するのか』（いのちのことば社、2022年）11-12頁参照

¹⁴カール・バルト『国家の暴力について 死刑と戦争をめぐる創造論の倫理』（新教出版社、2003年）88頁

¹⁵フロイト曰く、「永遠の平和を達成するのに、戦争は決して不適切な手段ではないだろう。戦争は大きな単位の社会を生み出し、強大な中央集権的な権力を作り上げができるのです。中央集権的な権力を暴力を管理させ、そのことで新たな戦争を二度と引き起こさせないようにできるのです。しかし、現実には、戦

筆者は、「文化の発展を促せば、戦争の終焉へ向けて歩み出すことができる！」というフロイトの意見に賛成する。しかし筆者は、その文化を「福音の文化」と規定したい。すなわち、筆者は「福音の文化の発展を促せば、戦争の終焉に向けて歩み出すことができる！」と考える。

筆者が言う「文化」とは、人間の価値観を規定するものである。そして「福音の文化」とは、この世界を再創造していくための思想的資源のことである。無論、その思想的資源は、キリストの福音に基づくものでなければならない。フロイトによれば、文化を獲得することで、知性の力が強くなり、攻撃欲動は内面に向かって行くようになる。その結果、戦争をなくす方向に人間を動かしていくと期待できるのである¹⁶。

神が創造したこの世界は、愛や赦しに満ちた場所、正義が行われる場所、平和が実現する場所、公平かつ公正な扱いがなされる場所、正直さや誠実さに溢れる場所であるべきだ。なぜなら、我々は「神のかたち」に創造されたからである（創世記1:26-27）。天地創造の時には、「それは非常によかったです」（同1:31）と言われた世界である¹⁷。しかし、世界の現状は、神の意図したものとは調和していない。それゆえに、神は福音の文化を発展させることによって、真に世界を正そうとしておられるのだ¹⁸。それこそ、イエスの御国のヴィジョンであった¹⁹。

もちろん、福音の文化は広範囲に及ぶものである²⁰。しかし本論では、その争は『永遠の平和』を実現させてはいません。……征服によって勝ち得た状態は、長続きしないものだからです。」（AINSHULTAIN / フロイト『ひとはなぜ戦争するのか』、32-33頁）と。

¹⁶ AINSHULTAIN / フロイト『ひとはなぜ戦争するのか』54-55頁参照

¹⁷ J.D. クロッサンは、神の正義を「分配的正義」として説明する。すなわち、創造主なる神は世界の世帯主であり、その世帯のすべての構成員に富や食物が十分かつ公平に行き渡ることが本来あるべき姿である、という理解である。河野克也「解説 イエスからの逃れられないチャレンジ」J.D. クロッサン『最も偉大な祈り 主の祈りを再発見する』（日本キリスト教団出版局、2022年）248頁参照

¹⁸ ライト『クリスチャンであるとは』304-334頁参照

¹⁹ イエスの御国のヴィジョンについては、スコット・マクナイト『福音の再発見』（キリスト新聞社、2013年）を参照のこと。

²⁰ マクナイトは、イエスの福音は、単なる救いの文化だけでなく、福音の文化を生み出すものであるとする。そしてキリスト者とは、自分の人生を以下のものに捧

中の平和について、それが集約的に語られている山上の説教のいくつかの言葉から明らかにしていく。そして、そのイエスの平和思想から日本国憲法の平和主義を考察し、日本の文脈における福音の文化の発展の可能性を検討していく。なぜなら筆者は、日本において憲法九条が、福音の文化の平和の部分に関して、多くの人びとと共有できる思想的資源であると考えるからである。

2. イエスの平和思想

山上の説教でイエスが語ったこと

マタイの福音書五章から七章の「山上の説教」、あるいは「山上の垂訓」と呼ばれる箇所は、福音の文化の発展を促すための思想的資源の宝庫であると言えよう。

しかし、山上の説教の解釈史は、激しい論争の歴史であった²¹。いずれの時代のキリスト者も、山上の説教が語ろうとするものは何かについて、新しく問い合わせ直すことを求められてきたのである²²。

たしかに、イエスの精神を失うことなく、二千年の歴史を越えて、山上の説

げることによってイエスに従う者であると定義する。①イエス自身の考えによつてはじめられた神の御国、②神を愛し、他者を愛する人生、③正義によってかたどられた社会、特に弱者や社会の邪魔者にされている人たちを大切にする社会、④平和、⑤地域教会という文脈で知恵を得ることに献身している人生。マクナイト『福音の再発見』220頁

²¹ 伊藤明生は、山上の説教の主要な理解（あるいは解釈）史として、次の三つを挙げている。すなわち、①ルター、②再洗礼派など宗教改革などの急進派、③J.ヴァイスとA.シュヴァイツァー、である。そして、この主要な解釈を概観するなかで、山上の説教理解の五つの問題点（①山上の説教は誰に語りかけられているのか、②山上の説教は一字一句実践し、守らなければならない道徳律か、③個々の言葉は、どの程度、終わりの時の到来を期待する気持ち（終末観）に支配されているか、④山上の説教とモーセの律法とはどのような関係にあるのか、⑤山上の説教とパウロの恵みの福音とは、どのような関係にあるのか）を明らかにし、解釈的に考察をしている。伊藤「山上の説教の理解をめぐって」『キリストと世界』1号（東京基督教大学、1991年）43-60頁。その他、宮田光雄「論争の中の『山上の説教』——解釈の歴史とその諸類型」『キリスト教思想史研究』（創文社、2008年）など、参照。

²² 宮田光雄『山上の説教から憲法九条へ』（新教出版社、2017年）17頁

教を現代的な平和の問題に適用することは、困難な課題であろう。なぜなら、新約聖書の時代には核兵器や化学兵器、あるいは生物兵器などの大量殺戮兵器は想定されてはいなかったはずだからである。我々を取り巻く世界の状況は、一世紀のユダヤ世界の状況とは全く異なっている。

大量殺戮兵器の脅威のもとで、たとえば「悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つ者に左の頬を向けなさい。」などの言葉を、現代的な平和の問題に適用することは可能なのだろうか。かかる問い合わせについて、新約学者のゲルト・タイセンの次の言葉は示唆に富んでいる。

多くの者は、このような愛敵や非暴力、無所有のエーツスを世界史上の〈日曜規範〉のなかに算入している。しかし、これらは、われわれの社会関係がしだいに不安定になりつつあるときに、〈平日〉にとっても重い意味をもつようになるかもしれない。社会的な変革に迫られていると同時に、内外の平和が必要とされている状況において、われわれは、おそらく、われわれが思っている以上に、いつそうラディカルな行動の変革を求められている。これまで機能しえなかつたものが機能しうるものとなり、これまで人類の倫理的な贅沢品のなかに算入されてきたものが人類の生き延びるための可能性となる。——このことが、いつの日か明らかになるであろう²³。

山上の説教は、現代的な平和の問題においても、その想像的な力を發揮するであろう。否、我々はその想像的な力を最大限発揮させなければならないのである。

²³ G.Theissen, Soziologie der Jesusbewegung: Ein Beitrag zur Entstehungsgeschichte des Urchristentums. 7. Auflage. (Gütersloh: Christian Kaiser, 1977) 荒井・渡辺共訳『イエス運動の社会学——原始キリスト教成立史によせて』(ヨルダン社、1981年) 213頁。なお、本論文での引用は、宮田『山上の説教から憲法九条へ』(新教出版社、2017年) 25頁を参照した。

キリスト者として平和の問題について考えるときに、イエスは何を教えたのか、という素朴きわまりない問いに、先ずは直面せざるをえないだろう。それらが上記の、アクチュアルな戦争と平和の諸問題とどう関連するのかは、それからの問題である。以下に、山上の説教のイエスの革命的な言葉のいくつかを検討していく。

i. マタイ 5 章 9 節

一言で言えば、山上の説教は、天の御国に属している者たち（弟子たち、あるいはキリスト者たち）の、天の御国の民としてのふさわしい生き方が提示されている²⁴と言えよう。新約学者のリチャード・ヘイズは、マタイはイエスの山上の説教を実現不可能な理想とは考えておらず、「神の国と、弟子たちの共同体が招かれている生活についての計画の開示」と考えている²⁵。また N.T. ライトは、イエスの教えは「イスラエルに対してイスラエルになれと迫る」挑戦だったと述べている²⁶。イエスは、彼に従う者たちに地の塩、世の光になることを望んでいるのである（マタイ 5：13-14）。

さて、山上の説教は九つの幸い²⁷の宣言（Μακάροι）から始まっている。本論のテーマである「平和」については、その第七番目に言及がある。

平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと
呼ばれるからです。（新改訳 2017）

²⁴ 伊藤「山上の説教の理解をめぐって」54-55 頁

²⁵ Richard B. Heys, *Moral Vision of the New Testament: A contemporary Introduction to New Testament Ethics.* (New York: HarperOne, 1996) , 321. 『新約聖書のモラル・ビジョン——共同体・十字架・新しい創造』（キリスト新聞社、2011年）は、*Moral Vision of the New Testament* を要約し、それを前提に講演した *New Testament Ethics: The Story Retold* を翻訳したものである。

²⁶ N.T. Wright, *Jesus and the Victory of God.* (Minneapolis: Fortress, 1996) , 288.

²⁷ 第一番目から第八番目までは、冠詞 *oi* を伴って名詞的に使用された分詞によって表現されている。但し、第九番目は二人称複数の動詞が使用されている上に条件節を伴っているので、文體的な違いが見られる。原口尚彰『幸いなるかな』（新教出版社、2011年）60-61 頁

先ず注目すべきは、平和は自然発的に存在するものではないということである。自然状態とはむしろ戦争状態なのである。戦争状態とは、敵対行為の脅威がつねに存在している状態のことである²⁸。なぜなら、上述のように、人間には罪があり、「憎悪に駆られ、相手を絶滅させようとする欲求」があるからだ。その意味で、山上の説教は、徹底して現実的である。だからこそ、我々は平和を新たに創出していかなければならないのだ。

では、「平和」とは何か。よく知られていることであるが、新約聖書における「平和（εἰρήνη）」とは、ヘブル語シャローム（שָׁלוֹם）の持っている多義的な豊かさを反映しつつ、国家間で争いがない状態（使徒24:2、I テモテ2:2）、個人間で争いのない状態（ルカ12:51、ローマ14:19、エペソ4:3）を意味している²⁹。つまり、「平和」の大前提是「戦争がない状態」である。

ところで、この「平和をつくる者たち（οἱ εἰρηνοποιοι）」という言葉の背景には、箴言10:10LXXがあるのかもしれない³⁰。

ο δὲ ἐλέγχων μετὰ παρησίας εἰρηνοποιεῖ. (LXX)
しかし、公然と諫める者は平和をもたらす。(私訳)

箴言10:10LXXには、「平和をつくる者たち（οἱ εἰρηνοποιοι）」という名詞句はないが、公然と諫める者が「平和をもたらす（εἰρηνοποιεῖ³¹）」という動詞句が使用されている。この「諫める（ἐλέγχω）」という言葉は、たとえば兄弟の罪を「指摘する」時（マタイ18:15）、あるいはバプテスマのヨハネが領主ヘロデの悪事を「非難した」場面（ルカ3:19）などで使用されている。すなわち、「諫める」とは、その罪や悪事を注意深く調べ、指摘し、明るみに出す、ということである³²。

²⁸ イマヌエル・カント『永遠平和のために/啓蒙とは何か他3編』（光文社、2022年）162頁

²⁹ 真鍋孝「平安・平和」『聖書神学辞典』（いのちのことば社、2010年）592-596頁

³⁰ 原口『幸いなるかな』63頁

³¹ εἰρήνη + ποιέω 新約聖書ではコロサイ1:20に一回だけ出てくる。

³² Bauer, W. A *Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*. 3 d rev. and ed. by F.W.Danker. (Chicago: University of Chicago Press,

ちなみに、この幸いの宣言の後半には、「その人たちは神の子どもと呼ばれるからです。」という約束が伴っている。当時の地中海世界において、ローマの平和 (Pax Romana) をつくり出し、また支える者として、「神の子」と呼ばれていたのはローマ皇帝だけであった。山上の説教において、そのローマ・ギリシャ世界の通念に対して、真の平和をつくり出すのはイエスの教えに従う者たちであることを主張している点が際立っている³³。

平和をつくり出すことは実際的な課題である。では、この箇所から何が言えるだろうか。もし箴言 10：10LXX がその背景にあるとすれば、あくまでも言葉の力による平和づくりが示唆されているのかもしれない。そして、そのためには、相争う二組の当事者の間を仲介する第三者的な立場にあることが求められているのかもしれない。なぜならイエス自身が、神と人との間の仲介者だからだ (I テモテ 2:5)。その仲介者としてのイエスの事業を継承するからこそ、平和をつくる者が「神の子」と呼ばれているのだろう。

そのためには、社会的信頼の獲得に向けて、最大限の努力と取り組みが必要である。

たとえば、バチカン市国は世界最小国でありながら、国際政治における影響力は計り知れない。バチカンは国際紛争のみならず、国際的諸問題の解決に深く関与し続けている³⁴。

また、南アフリカ聖公会のケープタウン大主教に就任したデズモンド・ツツの類まれな働きにも注目したい。ツツ大主教は、ネルソン・マンデラ大統領によって、アパルトヘイト体制下の残虐行為を明るみにし、かつての迫害者との和解を実現する役割を担う機構であった、真実和解委員会の委員長に指名された。世界中で多くの講演を行い、社会的、経済的、人種的正義を求め、戦争の終結と諸民族間の非暴力的和解を求めて呼びかけた。ツツ大主教は力強く語っている。

2000) , 315.

³³ 原口尚彰「新約聖書における平和」『国際交流研究 国際交流学部紀要 21号』(フエリス女学院大学国際交流学部紀要委員会、2019年) 163 頁

³⁴ 玉井雅隆「バチカンと国際政治——CSCE におけるバチカンの役割と宗教」『信仰と平和—平和研究』(第49号) (早稲田大学出版部、2018年) 63-86 頁

この素晴らしい世界のいたるところで、神は私たちに、シャローム——平和と安全性——、正義、思いやり、気遣い、分かち合い、笑い、喜び、和解の御国を広めるよう、呼びかけておられます。神はいまこの瞬間にも、私たちを通して世界を変容させているのです。なぜなら神は私たちを信じ、私たちを愛しているからです。神の愛から私たちを引き離せるものなどあるでしょうか？何もありません。まったく何も。私たちが神の愛を兄弟姉妹、つまり、神の他の子どもたちと分かち合うなら、私たちに抵抗できる圧政者も、終らせることのできない迫害も、満たすことのできない飢餓も、癒すことのできない傷も、愛に転化できない憎しみも、実現できない夢もないのです³⁵。

この「平和、安全、正義、思いやり、気遣い、分かち合い、笑い、喜び」こそが、福音の文化が花開いた状態であると言えよう。

我々は、キリスト者として、単に戦争の問題のみならず、社会的な諸問題にも関心を示し続け、仲介者・仲裁者としての立ち位置を獲得することを目指しつつ、言葉の力による平和づくりをしていかなければならないのではないか。

ii. マタイ5章 38-39 節

『目には目を、歯には歯を』と言っていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つ者に左の頬を向けなさい。（新改訳 2017）

「目には目を、歯には歯を」というのは、『ハンムラビ法典』（紀元前 18 世紀）

³⁵ デズモンド・ツツ『ゴッド ハズ ア ドリーム』（竹書房、2005 年）148 頁